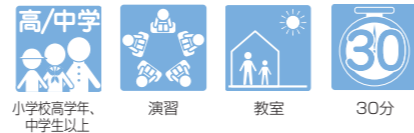


14 家族との連絡カードをつくろう！

災害時にどこに避難すればいいか、どこに連絡すれば家族と連絡がとれるかを書いた連絡カードを子どもたちにつくってもらいます。



学習の目標 日ごろから災害時の対応や連絡方法を家族と話し合っておく必要性を学びます。



時間軸

実施内容

対象人数★5～40人

1 導入（震災時の映像を見せる）（10分）

⇒映像1～3

- 映像1～3（阪神・淡路大震災関連）を見せ、災害時の被害の様子をイメージしてもらいます。
- 地震が発生した場合、通信手段が途絶すること、災害の混乱の中、安否を確認するのは大変困難になることなどを伝えます。
- 阪神・淡路大震災時には、携帯電話が一般的ではなかったため公衆電話に人々が殺到したこと、現在は携帯電話が普及し、災害時の連絡体制についても「災害用伝言ダイヤル171」、携帯電話の「災害用伝言板」があることも補足するとよいでしょう（資料14-2・14-3を参照）。

連絡カード

2 連絡カードの作成（15分）

⇒資料14-1

- 資料14-1を配付し、自分の「連絡カード」「我が家の避難先メモ」を作成してもらいます。
- なお、学校の授業中に実施している場合、家族で話し合っておく内容もあるので、あらかじめ家の人と話し合い、事前に調べておき準備してもらいます。

我が家の避難先メモ

3 まとめ（5分）

⇒資料14-2、14-3

- 作成したカードについて、どこで地震が起きるかわからないこと、被災した場所ごとに対応を考えること、外出中などでは今回作成した連絡カードを常に身につけておくことで、家族への連絡や集合場所などを確認できること、などを伝えます。
- また、家庭へのお土産として、資料14-2（災害用伝言ダイヤル171）・14-3（携帯電話の「災害用伝言板」）の資料を渡して説明しておくといよいでしょう。



実際の災害時には、「張り紙」も役に立ちました

● 指導ポイント

「カードをつくる」という作業は、あくまできっかけに過ぎません。カードに必要な事項を記入できるように家族と話し合う時間をつくってもらうことが重要です。

● 自主防災組織の関わり方

自主防災組織で実際に行っている連絡方法の紹介をお願いします。

● 準備するもの（目安）

準備品	数	備考
<input type="checkbox"/> 映像「阪神・淡路大震災関連」	1	映像1～3
<input type="checkbox"/> 資料「連絡カード」	人数分	資料14-1（配付用）
<input type="checkbox"/> 資料「災害用伝言ダイヤル171」	人数分	資料14-2（配付用）
<input type="checkbox"/> 資料「携帯電話の『災害用伝言板』」	人数分	資料14-3（配付用）
<input type="checkbox"/> ヒモ	人数分	
<input type="checkbox"/> パンチ	人数分	
<input type="checkbox"/> スクリーン	1	必要に応じて準備
<input type="checkbox"/> プロジェクタ	1	必要に応じて準備
<input type="checkbox"/> パソコン	1	必要に応じて準備
<input type="checkbox"/> スピーカー	1	必要に応じて準備

● 家庭への持ち帰り

このメニューは家庭での話し合いなしには実施できません。作成した連絡カードを持ち帰り、緊急時の連絡方法について話し合ってもらおうよう指導してください。

● このメニューに関する+αの知識

- 災害時に自分の居場所を知らせる方法として、NTTの災害用伝言ダイヤル「171」があります。毎月1日に試すことができるので事前に試しておきましょう。（資料14-2）
- 阪神・淡路大震災では電話をかけようとした人が一時的に集中して通話ができなくなったため、安否確認や自分の居場所、状況を知らせるのに大変苦労したことは有名な話です。家族が離れているときに災害が発生した場合の集合場所などを事前に決めておくことが大変重要です。
- 「張り紙」が掲示板代わりにするなど、災害の教訓として役立つ方法があります。停電していてもできる方法も考えておきましょう。

● ひと工夫

このメニューは単独で実施するよりも、他のメニューで災害のことを学習したあとに、家庭へ持ち帰れるメニューとして実施すると効果的です。